

福島の
児童文学者18

『横山 健』

「私が童謡―童謡は私そのものだ」という童謡詩人がいる。

名を横山健（よこやま・たけし）という。大正十三年、会津若松市の医師の三男として生まれている。市内の小・中学校から福島師範に進み、その後は教師や舞踊・バレエ研究所の講師、出版社の編集者等をしながら、子供たちのために童謡・詩・学校劇脚本等を書き続けている。その数は三千編を越えると言われている。

〔幼年時代〕

健の幼年時代は、八人の子供たち、沢山の本、そして溢れる音楽の中にあつた。横山家の子供たちは、各自一冊づつ違う雑誌を購読していたため、『キンドーブック』や『少年クラブ』、『少女画報』などの雑誌が毎日のように届けられた。また、病院の待合室には大人向けの『キング』や『講談クラブ』、新聞なども備えられてあり、健の回りにては沢山の活字が溢れ、自然とそれらに目を通すうち、当然のごとく活字の魅

力に取りつかれるようになっていった。それは、雑誌の発売日には書店へ行き、先読みするほどであった。さらには家には蓄音機もあり、毎月数枚のレコードを購入していた。オルガンやギター、アコーディオン等の楽器も兄弟で演奏していたという。父は謡曲を、姉妹も仕舞や琴をと、当時としてはとても恵まれた環境の中で幼年時代を過ごした。

〔文 学〕

活字の魅力に取りつかれた健は、小学生の時から、童話まがいの読み物らしき作品『わが輩は犬である』、『学校の花』等を書いていく。また、数日の間で、便箋用紙一冊分の脚本集も書き上げたという。中学時代には、二年生から四年生の時に、それぞれ「郷土童謡について」「自己を信ぜよ」「芭蕉」の論題で登壇し発表をしている。

五年生の時には研究発表部（文芸部と弁論部が統合したもの）の委員に選出されている。この時顧問部長を努めていたのが、『東野辺慎一』であった。東野辺は、ペンネームを『東野辺薫』と言ひ、ご承知の通り、『和紙』という作品で昭和十八年下期の芥川賞を受賞している。この時の出会いは、決して忘れることのできないものとなった。

〔童 謡〕

健と童謡との初めての出会いは、昭和天皇の第一皇子（現天皇）の御生誕

奉祝の歌募集に応募、入選、そして本に掲載された事に始まる。小学三年生の時であった。中学生の秋には、童謡詩人『石橋和明』と知り合う。結果的に、これが一生を決定づけることとなる。以来、両親や兄弟の忠告にも耳をかさず、一途に童謡創作の世界へと入っていった。

しかし、童謡詩人のほとんどがそうであるように、童謡だけを書いていては充分な生活をするにはできず、彼もまた様々な職業に就いている。ただ彼が違っていたのは、あくまでも生活のためであり、自分の自由な時間が無くなるとの理由で、三年を期限として止めていることである。

また、ビクターを中心に童謡の作詞を続け、ヒット作品も生み出しているが、決して流行歌謡に手を染めることはなかった。健は書いている。

「私が童謡―童謡が私そのものだ：そんな開き直ったコトバが心に浮かぶ程、童謡の海に溺れきって来たのだから」

と。それは、いかに子供と童謡を愛しているかの現れの言葉と取れる。

そんな彼は、今の子供たちを心配してこう言う。

「子どもたちにとって教師と生徒の心のつながりは、家族とのつながり同様大切にあり、また子どもたちが自分の一生をかけてやりたい目標をもつ

ことが大切だと。」

つながり

母と子の つながり は なアに、
へその緒 乳房の なつかしき、
やさしく だかれた 温かさ。

ああ ふるさとの 宮の森、
菜種畑や 赤とんぼ、
花屋は チョッキン 町の歌

父と子の つながり は なアに、
ひげづら せなかと 広い胸、
いつでも たよれる たくましさ。

ああ 船出する 帆前船、
われは 海の子 太平洋、
松原 海鳴り 日本海。

人と人 つながり は なアに、
はげます 友だち 隣の人、
先生 生徒の ころろ綱。
ああ ささえあう 人の文字、
贈る 言葉に こめた愛、
蛍の光と 窓の雪。

国と国 つながり は なアに、
歴史や 伝説 ものがたり、
いたわり まじわり 話し合い。
ああ 言葉さえ のりこえて、
宇宙の 子どもの 青い星、
ラブ・イズ・ベストの 明日の空